

北朝鮮核事故の巨大な危険性

漢和防務評論 20150703 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

衛星写真から見た北朝鮮の核施設の状況について、漢和防務評論の記事を紹介します。

記事は、北朝鮮の核施設に事故が起きると周辺国、特に中国に巨大な被害を与えてしまう可能性を指摘しています。北朝鮮はなぜか中朝国境付近に核施設を集中して建設しています。米韓による攻撃を受けにくくする戦略なのか或いは中国からの攻撃を受けにくくするためなのか。

2012 年、北朝鮮は、“核兵器保有”を先軍政治の政治遺産として、正式に憲法に記載しました。中国の“朝鮮半島非核化”政策を徹底して破壊、失敗させる目的があると KDR 誌は指摘しています。

KDR 編集部

北朝鮮は、4 回目の核実験を行うのか？この問題に人々の関心が高まりつつある。この 2 月、米国国防情報局局長は、北朝鮮が 4 回目の核実験を行う可能性に憂慮を表明した。中国軍の高級将領も初めて類似の表明を行った。中国の国営メディアはすでに“抗美援朝”の表現を使うことは無く、代わりに“朝鮮戦争”の言い方を使うようになった。朝鮮戦争開戦の原因に関して、中国政府はひたすら“米帝国主義が理不尽にも鴨緑江まで戦火を広げた・・・”と主張してきたが、最近の中国国営メディアは“南北双方が統一問題を巡って内戦を勃発させた”としている。

中朝間の冷戦は、公然の秘密である。真の問題は何か？北朝鮮の核施設の衛星写真を詳細に判読すると、驚くことに、“先軍政治”の下に建設されたこれらの核施設は、基礎工事が貧弱であり、また奇妙な位置にある。いつの日か、一旦北朝鮮の核施設で重大な火災、陥没、原子炉の爆発等々の事故が発生した場合、どのように処置するのか？直接の脅威対象としては、まず中国、韓国、ロシアである。後の 2 者に就いて幸運な点は、北朝鮮の主要な核施設が中朝国境付近に建設されていることである。安全性から考慮すると、北朝鮮の核弾頭基地もまた中朝国境付近に建設されているはずである。北朝鮮の最大の戦略空軍基地は義州 (UIJU) であり、中朝国境から 2000 M しか離れていない。一旦衝突が発生すると、米韓連合軍はこれらの基地を空襲し、核弾頭が誘爆する。どうしたら良いだろうか？

原発施設

寧邊の原発の基礎工事が貧弱であることには誰もが驚かされる。再び悪い情報が入

った。最近 5 ヶ間停止したままであった寧邊の原発が 2014 年 12 月、米国のシンクタンク衛星写真の分析の結果、ボイラー煙突から水蒸気が出はじめ、屋根の積雪が溶けていた。したがってボイラーは、再度始動した可能性がある。同原発は 2013 年に始動し、2014 年 8 月に暫時停止していた。

金正恩時代の” 経済と先軍政治を並進発展させる” 路線は、核兵器開発が強化されることを示している。寧邊原発は中朝国境から 104 KM しか離れていない。しかも 2012 年に金正恩時代になってから、核政策の最大の変化は、” 核兵器保有” を政治遺産として憲法に記載したことである。したがって法理上から言えば、北朝鮮は核兵器を廃棄することが出来ない。ここには少なくとも 2 つの原発があり、1 つは 1965 年に旧ソ連の援助で建設された IRT-2000 型出力 8MW の原子炉（同年臨界に達した）であり、現在は運転されていない。

この原子炉の周囲には、無数の建築物があり、ここが北朝鮮の核エネルギー開発の重要な研究センターであることを示している。注意すべきことは、同地区の道路が修繕されていないことである。このことから同基地の弱体さが分かる。同センター以南 1000 M のところに 1982 年に北朝鮮が自力開発した 500 MW の原子炉がある。黒鉛を利用し 1985 年に臨界に達した。燃料棒は天然ウランを使用し全部で 8000 本、総重量は 45 トンである。宣伝通りに可動率が 80% であるとすれば、毎年少なくとも 5 KG の核兵器用ウランが精製できる。これは原爆 1 個分の量である。九龍江を渡ると、国産原子炉から東南 1500 M のところに、さらに大規模な原子炉が建設中である。しかし未完成である。これは明らかに経費不足のため暫時建設中止しているように見える。これが著名な 2 号原子炉であり黒鉛型である。更に西南 2000 M のところに、一連の関連施設が出現している。これらは核廃棄物再処理センター及び核廃棄物貯蔵センターである可能性が極めて高い。地区の東部全体が山岳地帯である。標高は 500 M 前後である。したがって寧邊に、核兵器用ウランを貯蔵する巨大な地下施設が建設された可能性は否定できない。

これらの建築群は、衛星写真上では、原子炉を含め、石灰で塗装されただけであり、みすばらしく 1980 年代のソ連の同種建築に酷似している。それに比べ、日本の原子炉は、衛星写真で見ると清潔で整頓され塗装技術も優れている。北朝鮮の原子炉周辺は、車両が少なく、従業員が出勤する場合、徒歩或いは自転車による可能性が高い。これは 2014 年の衛星写真を見た所見である。

寧邊から西北 20 km にある秦川地区は、一度出力 200 MW の第 3 号原子炉の建設が予定されたが、電力不足と黒鉛不足により建設が中断している。ここは新義州から距離 80 KM である。これらのことから、北朝鮮の原子炉は、全て黒鉛型を使用していることが分かる。これはチェルノブイリで使用した方式と同じである。無視できないことは、寧邊の核施設が如何にみすばらしくとも、規模が大きく、核施設

の長さが 4 KM に及び寧邊全体が核都市化していることである。北朝鮮のような小国がなぜこのような大型かつみすばらしい核施設を必要としているのだろうか？

中朝国境の長尋河口から 40 KM 以内の大館地区にも核物質を貯蔵している可能性がある。人民軍作戦局に勤務したことがある LI CHINSHON は、2001 年韓国に亡命した。彼は、北朝鮮がパキスタンからウラン鉱を精錬する遠心分離機を購入し、大館郡付近の天魔山内に巨大な核物質抽出施設を建設した、と述べた。

何処で核実験を行っているのか？

北朝鮮は、すでに 3 回の核実験を行った。核実験場は、豊溪里地区にある。ここにはすでに相当規模の実験場が建設されている。縦横 2 KM 以上あるが、相当みすばらしい。付近に市街地はない。地下坑道と運搬区によって形成され、道路さえ整備された形跡がない。この地域は、北朝鮮山地でも最も堅い岩石で覆われている。長白山と延邊自治区の直線距離は 130 KM しかない。東海岸の MUSUDAN-RI (舞水端里) には著名なミサイル実験場があり、中国の五寨に酷似した発射場を保有している。道路は土質のままである。舞水端里も核実験基地も中朝国境から直線距離で 150 KM である。

西部の東昌里では、衛星発射センターが建設中である。これらのセンターは実際上ミサイル発射試験センターでもある。戦時には、必ず米韓連合軍の多重攻撃を受ける。しかしこの場所は新義州から 44 KM しか離れていない。同センターは、さらに大型化し試験地区全体の長さが 4 KM もある。また 2 つの発射塔があり、道路は広く、直線的である。しかもアスファルト舗装されており北朝鮮では最も条件の整った衛星発射センターである。エンジン・テスト・センター、燃料貯蔵センター、運搬ロケットの最終点検センターが全て完成している。同センターの長さは 94 M であり、内部の最終測定は、ロケットは横に倒して行う可能性がある。この長さに注目し、MUSUDAN-RI のロケット試験センターと東昌里の衛星発射センターを比較すると、将来、北朝鮮の長距離戦略ミサイルの試射は、東昌里で行われる可能性が極めて高い。

ここには相当大型のミサイル試験庫が建設されている。長さは 53.44 M+27 M で、発射塔が 1 つ、エンジン・テスト・センターが 1 つ、監視センターが 1 つある。北朝鮮が、故意に中国から 47 KM しか離れていない東昌里に建設したことは、別の問題を引起す。それは、一旦ミサイルが発射された後、故障が発生し、かつ自爆装置が働かなかった場合、ミサイルの残骸が中国国内に落下する可能性があるからだ。

放射能汚染対処

北朝鮮東海岸花台地区は、中、長距離弾道ミサイルの配備地区であり、試験地区で

ある。長白山延邊自治州からの距離がわずか **150 KM** である。衛星写真で見ると、この地区は経済が停滞し、まともな住居は見当たらず、山が険しい。発射基地は地下にあるのかどうか。たとえ地下にミサイル基地があったとしても、もし放射能漏洩があった場合、危害は朝露国境、中朝国境に及ぶことになる。

最も恐るべきは、核の漏洩事故である。旧ソ連 1986 年のチェルノブイリ、日本の福島原発事故の結果を分析すると、一旦放射能漏洩事故があると、**20 乃至 30 KM** が無人区となる。**100 KM** 以内が極大な放射能汚染区となる。いわば、一旦寧邊で核事故が発生した場合、中朝国境の都市、市街地は極大な放射能汚染区となる。また **300 KM** に及ぶ国内地区は放射能汚染にさらされ、農業、牧畜業が極めて大きな影響を受ける。言い換えれば、寧邊が一旦有事となれば、中国東北国境内 **200 KM** 縦深が高危険区となる。**200 KM** 縦深の中に、鞍山、瀋陽等々の中国の大都市が含まれる。

ウクライナの核事故の経験から見ると、核放射性元素は風向によって **800 KM** 移動する可能性がある。このことは、風が西南方向に吹いていれば、北京、大連も放射能汚染の危険があるということだ。

上述のごとく、唯一の朝鮮人民軍空軍戦略爆撃機基地は義州 (UIJU) 基地である。ここには中国が提供した **IL-28 (H-5)** 戦略爆撃機が配備されている。ここは中朝国境の都市丹東から **2 KM** である。もしここに核弾頭が貯蔵されていれば、一旦事故が発生した場合、新義州で核爆弾が爆発することと同じである。

2012 年、北朝鮮は、”核兵器保有”を先軍政治の政治遺産として、正式に憲法に記載した。如何なる核保有国家であっても、中国の”朝鮮半島非核化”政策を徹底して破壊、失敗させることはしない。中国人の一部は、北朝鮮を依然として”防壁”であると信じているが、”核による防壁”であるとは思ってもいまい。

以上